

# ボランティアで運営するバラ園

野村 和子(バラ文化研究所副理事長)

私は今2足のわらじを履いています。厳密に言うならば3足のわらじというべきかもしれませんが。

1足目は職業としてのみどりの相談員、2足目はボランティアでバラ文化研究所の運営に携わっています。そして3足目は講演や執筆です。

バラ文化研究所をボランティアで運営しはじめて10年になります。その間少しの後退もなく、地道ではありますが、発展してきたと思っています。今またバラ文化研究所は大きな岐路に立っています。10年慣れ親しんだ土地を離れ、新しい場所で行政と手を組んでのバラ園の運営を始めようとしているのです。

行政サイドの人間は当然ながらお役人が仕事の一環として携わります。そこへすべてボランティアの人間が協力していくのです。これからまた、さまざまな問題が生じることでしょう。ボランティアだけでこじんまりとバラ園を作り、公開してきて、多くの方々に支援されてきた-----それをなぜ手放したか、それはこの10年、全員が確実に10歳年をとった、ということ。ということは次の10年が過ぎたら、もう力仕事ができる人間がいなくなってしまう、そうなれば、バラ園も研究所も自然消滅です。

大きな目標を定めて興したプロジェクト、それが加齢と後継者の問題でもろくも崩れ去ってしまうのです。せっかく興した研究所をさらに発展させたく、作ったバラ園は長く存続させたい、それが行政と組むに至った大きな要因でした。

少なくとも、今までの過程では、ボランティア活動はほぼ、うまくいっ

ていたと思っています。近年はこうした事例もいろいろとあるようですが、それぞれ事情が異なるでしょう。私の関わっているケースを少しご紹介しましょう。

## バラ文化研究所発足の発端

私は京成バラ園芸の研究所で育種家として世界的に著名な鈴木省三の助手をしていました。

余談になりますが、鈴木省三は京成バラ園芸設立以前は東京の奥沢で「とどろきばらえん」を経営していました。繁忙期になると鈴木省三からの依頼でいつも恵泉の園芸科から数人が「とどろきばらえん」にアルバイトとしてでかけました。

かつて、鈴木省三が当時小平にあった園芸科を訪ねたとき、学生の影が見えないのを不審に思い、よく探したところ、果樹園で寒肥のために身が隠れるくらい大きな穴を掘っていて気づかなかったのだという話を聞いたことがありました。女子学生がその大変な作業に黙々とひたすら励んでいるのを見て感激し、以来アルバイトは恵泉以外からはとらななかった、という恵泉轟員で、おかげで私も園芸科の卒業生であるということだけで信用され、鈴木省三を通して代々の卒業生と知り合いになることも出来たのでした。

が、それは「恵泉なんだから、何でもできる」というとんでもない方に飛び火し、助手（雑用係りといった方が適切かもしれませんが）をはじめたばかりの私にとっては、大きすぎる課題が山のようにのしかかってきたのでした。「期待を裏切ってはいけない」「恵泉の名に泥を塗ってはいけない」そんな大上段にふりかざしたものは意識してはいませんでした。でも片隅にはあったのでしょうか、菌を食いしばってひとつひとつをこなしていくうちに、いつの間にか16年もたっていたのでした。雑用係りではありましたが、門前の小僧なんとやら-----でバラに関することもたくさん吸収しました。吸収せざるを得ないことも多々ありました。ちょっとした依頼原稿はほとんどまかされるまでになっていましたから。つまり代筆です。それに

そこは園芸科卒です。昼休みも京成バラ園内やガーデンセンターをうろろして、常に目は植物に向いていました。こんなに恵まれた勉強の場はなかったでしょう。恵まれていた割には吸収度が低かったかもしれません。そんな時に、京成バラ園芸研究所の移転の話がおきました。2年の年月をかけてすべてのバラが接木されて引越しの用意が整ったのですが、大事なものは接木したのだから、と親木の方は廃棄処分が決まりました。それを鈴木省三は悲しんで、土地を持っている一人の人間に引き取ってほしいか、と依頼したのでした。

そういうことがある以前から鈴木省三はその人物に向かって「バラの博物館がほしい」と言っていました。引き取られていったバラは野生種、オールドローズ、モダンローズを含めて百数十種があったのでしょうか。

若い時に一時京成バラ園芸に在籍し、その後造園業も営んだことのある、その人物はそれら百数十種を改めて正規に譲り受け、それを元にして、小さなバラ園を作ることを考え、しかもバラの博物館づくりも目指す、というとてつもなく遠大な計画を立てて、私にも参画を呼びかけたのでした。こうしてバラ文化研究所を起し、その活動の一環として付属のローズガーデンアルバも同時にオープンしたのでした。

2年後に特定非営利活動法人(NPO)を申請し、紆余曲折はあったものの認証を受けることができました。そしてその人物が理事長となったのです。当時あったものといえば理事長が持っていた土地だけ、理事長が奔走して資材を譲り受け、それを使ってさまざまな構築物を作り上げていきました。どうにかオープンにこぎつけ、入園料をいただいてそれを運営管理費にあてることも決まりましたが、有料でオープンする以上はそれなりの要員も必要となります。

そこで、今度はボランティアの人集めがはじまりました。バラ文化研究所の趣旨に賛同してくださり、交通費、昼食代すべて自前、という条件ででしたが、ものめずらしさもあったのでしょうか、そして当時まだあまり一般的にはなっていなかったオールドローズに興味を持たれたかたもいらっしやいました。家には庭がないので、アルバに来て園芸作業をしたい、

というかたもおられました。心配は杞憂となってシーズン後も引き続きかなりの方々がボランティアで協力してくださいました。アルバをオープンしていた8年間、ずっとボランティアの方々に支えられてなんとか頑張ってくることができました。

ひとつ言えることは、中心になって運営を図る、5名の運営委員もすべてボランティアであったこと、それもまた共感を覚えていただく原因だったかもしれません。NPOの制度としては必要な要員は給料をとってもいいということになっているのです。

マスコミにも知られるようになり、入園者も増え、事務処理等の仕事量も増えてきて、はじめて専属のアルバイトの女性を一人採用しました。それでも仕事は増える一方。どんなに頑張ってみても、一人以上は雇えないのでそれらの仕事はすべて運営委員の肩にかかってくる。運営委員自身、ボランティアですから、それぞれ本職を持っています。毎日朝から晩までアルバにでられるわけではありません。アルバに行っている日の昼間は季節の作業が次ぎから次へと押し寄せてきます。ローズガーデンアルバに植栽されている種類のメインはオールドローズなので、大半は春だけの一季咲きです。年間3週間の開花期のために、11ヶ月と1週間は汗水たらして働いています。結局デスクワークは自宅へ持ち帰ることになってしまいます。

ときどきふっと、このボランティアって一体なんだろう？と考えてしまうこともあります。仕事の休みの日をすべてアルバへのボランティアに当てており、出られない日は「休ませてもらう」という感覚になってしまっているのです。

そして今、バラ文化研究所はさらに忙しくなりました。冒頭でも触れたようにいままでのアルバを閉園して、アルバにあったバラはすべて佐倉市草ぶえの丘バラ園に移植をしました。今度はアルバの3倍の面積になったため、そしてバラ愛好家の尽力で、日本にない珍しいオールドローズ、野生種の枝を大量にフランスやアメリカのバラ園より提供していただき、接木をして増やし、それらを公開するにいたったのです。

草ぶえの丘は佐倉市の施設です。つまり、今後は行政より委託されてバラ園を管理していくことになったのです。いままでのように鳩首会談をして決めたことをそのまま実行、というわけにはいかなくなりました。ただ、大切なこと、それは私たちが何を目的とし、何を理念として今まできたか、をしっかりと思いおこし、土台作りをさらに推し進めなければならない、ということです。

「バラの博物館がない国は文化国家とはいえない」と言った鈴木省三の言葉を実現すべく、立ち上がったのでした。新しい草ぶえの丘バラ園は原種部門は世界の原種、アジアの原種、中国のバラ、日本のバラなどのコーナーがあり、歴史コーナーでは改良の歴史を植栽でもって追うようにしてあります。さらにはオールドローズガーデンは香りコーナー、シェードガーデン、イエローガーデン、ホワイトガーデン、シングルローズ（一重）コーナーなどさまざまなテーマにより植えてあります。

オールドローズはヘリテイジローズともいわれます。ヘリテイジローズとは文化的遺産のバラということです。文化的遺産を収集し、保存すること、これこそ、博物館機能であると解釈して、箱ものではないフィールドミュージアムを目指しています。

「古典とは過去を振り返って、そこに手本とすべき模範を見出すことにより成立する概念である」という言葉があります。古典なくして、文化的遺産なくして未来を語ることはできないと思っています。鈴木省三が改良の原点となる原種の収集にこだわったのも同じ考えからだと思っています。私たちは園芸文化の発展、啓蒙のために今この運動を続けているのだ、という自負を持って今までも、そしてこれからも進んでいくつもりです。

偉そうな使命感的なことを言いましたが、そうしたひとつの目的のもとに集まり進んでいく仲間の交流が楽しいこともまた見逃せない事実ではあります。

たしかに現在目指しているのはフィールドミュージアムですが、同時に夫人から寄贈された鈴木省三氏の蔵書や資料をベースにして資料館も同時にオープンします。他の方々からの寄贈の申し出もすでにきており、バラ

愛好家が利用できるようさらに充実をさせていきたいと願っております。資料のみならず、香りに関する展示、色素に関する展示も専門の学者の協力を得て行います。

この10年着実に歩いてきました。これからもおごらず、歩みを続けていきたいと願っています。

あるいはこれはボランティアだからこそできたことかもしれません。営利を目的としない純粋な気持ちがあったからでしょう。作業が終わった夏の夕方、バラを見渡すテラスでお茶をいただくひととき、同じ目的を分かち合った仲間だからこそ、黙っていても理解し合える豊かさを共有できるのでしょう。また、作業の辛さがあるからこそ、一杯のお茶に幸せを感じられるのでしょう。

### **ボランティアとはなんぞや？**

それは誰かのために労力、知力を提供することではありません。

ボランティアは自分自身のためにすることなのです。これが、この10年で得た私の結論です。